

足跡

石川啄木

青空文庫

冬の長い国のことで、物蔭にはまだ雪が残つて居り、
 村端^{むらはづれ}

の溝^{せり}に芹^{せり}の葉一片青んではゐないが、晴れた空はそことなく霞んで、雪消^{ゆきげ}の路の泥^{ぬかるみ}濘の処々乾きかゝつた上を、春めいた風が薄ら温かく吹いてゐた。それは明治四十年四月一日のことであつた。

新学年始業式の日なので、S村尋常高等小学校の代用教員、千^ちはやたけし
 早健^{はやたけし}は、平生より少し早目に出勤した。白^{チヨオク}墨の粉に汚れた木

綿の紋付に、裾の擦切れた長目の袴を穿いて、クリくした三分刈^{かり}の頭に帽子も冠らず——渠^{かれ}は帽子も有^もつてゐなかつた。——亭^す乎^{らり}とした体を真^{まつ}直^{すぐ}にして玄関から上つて行くと、早出の生徒は、毎朝、控所の彼方^{かなた}此方^{こなた}から駆けて来て、敬^{うやうや}しく渠を迎へる。中に

は態々わざわざ渠おしぎに叩頭おしぎをする許ばつかりに、其処こゝに待つてゐるのもあつた。その朝は殊ことごとに其数かずが多かつた。平生へいぜいの三倍も四倍も……遅刻おち勝ちな成績できの悪い兎うさぎの顔かほさへ其中なかにに交まじつてゐた。健けんは直ちかぐ、其等そのらの心こゝろ々に溢あふれてゐる進級しんきゅうの喜よろこび悦よろこを想おもうた。そして、何がなく心が曇くもつた。

渠はその朝解職願しやくしやくがんを懐いだにしてゐた。

職員室しやくしんしつには、十人許じゅうにんばかりの男おとこ女をんな——何れも穢きたない扮装みなりをした百

姓達せいだつが、物ものに怖おびえた様ようにキヨロクきよろくしてゐる尋常科じんじょうかの新入生しんじゆせいを、一人づゝ伴ともれて来てゐた。職員四人分しやくしんににんぶんの卓つくや椅子いす、書類入しやくるいの戸棚かどなどを並ならべて、さらでだに狭せまくなつてゐる室むろは、其等そのらの人数にんずに埋うづめられて、身動みじろぎも出来ぬ程ほどである。これも今来た許ばつかりと見える

女教師の並木孝子は、一人で其人数を引受けて少し周章まごついたといふ態ふうで、腰も掛けずに何やら急いそがしく卓の上で帳簿を繰くつてゐた。そして、健が入つて来たのを見ると、

『あ、先生！』

と言つて、ホツと安心した様な顔をした。

百姓達は、床板に膝を突いて、交る／＼先を争ふ様に健に挨拶した。

『老婆お婆あさん、いくら探しても、松三郎といふのは役場から来た学齡簿の写しにありませんよ。』と、孝子は心持眉ひそを顰ひそめて、古手拭を冠つた一人の老女としよりに言つてゐる。

『ハア。』と老女は当惑した様に眼をしよぼつかせた。

『無い筈はないでせう。尤ももつと此この辺へんでは、戸籍上の名と家うちで呼ぶ名と違ふのがありますよ。』と、健は喙くちを容れた。そして老女としよりに、

『芋田いもだの鍛冶屋だつたね、婆さんの家うちは？』

『ハイ。』

『いくら見てもありませんの。役場にも松三郎と届けた筈だつて言ひますし……』と孝子はまた初めから帳簿を繰つて、『通知書を持つて来ないもんですから、薩さつぱり張はり分りませぬの。』

『可怪をかしいなア。婆さん、役場から真箇ほんとに通知書が行つたのかい？子供を学校に出せといふ書付が？』

『ハイ。来るにア来ましたがども、弟の方のな許りで、此児これ（と顎

で指して、のなは今年ア来ませんでなす。それでハア、持つて来なごあんさす。』

『今年は来ない？ 何だ、それぢや其児は九歳か、十歳かだな？』

『九歳。』と、その松三郎が自分で答へた。膝に補布を当てた股引を穿いて、ボロくの布の無尻を何枚もくく着膨れた、見るから腕白らしい児であつた。

『九歳なら去年の学齡だ。無い筈ですよ、それは今年だけの名簿ですから。』

『去年ですか。私は又、其点に気が付かなかつたもんですから：』と、孝子は少しきまり悪氣にして、其児の名を別の帳簿に書

入れる。

『それぢや何だね、』と、健は再老女またの方を向いた。『此兎これの弟といふのが、今年八歳やつつになつたんだらう。』

『ハイ。』

『何故なぜそれは伴れて来ないんだ？』

『ハイ。』

『ハイぢやない。此兎は去年から出さなければアならないのを、今年まで延したんだらう。其そんなかう風ぢや不可いけない、兄弟一緒に寄越すさ。遅く入学さして置いて、卒業もしないうちから、子守をさせるの何のつて下げて了ふ。其そんなかう風だから、此辺の者は徴兵に採られても、大抵上等兵にも成らずに歸つて来る。』

『ハイ。』

『親が悪いんだよ。』

『ハイ。そでごあんすどもなす、先生様、兄弟何方も一年生だら、
可笑をかごあんすべアすか？』

と、老女は黒漿おはぐろの落ちた歯を見せて、テレ隠しに追つゐ従し笑しょうひ
をした。

『構うもんか。弟が内務大臣をして兄は田舎の郡長をしてゐた人
さへある。一緒な位何でもないさ。』

『ハイ。』

『婆さんの理屈で行くと、兄が死ねば弟も死なゝけれアならなく
なる。俺の姉は去年死んだけれども俺は慍かうして生きてゐる。然さ

うだ。過こなひだ日死んだ馬喰ばくらうさんは、婆さんの同きやうだい胞だつていふぢやないか？」

『アツハハハ。』と、居並ぶ百姓達は皆笑つた。

『婆さんだつて其通りチヤンと生きてゐる。ハハハ。兎に角弟の方も今年から寄越あすすさ。明日あさつてと明後日は休みで、四日から授業が始まる。その時これ此兒と一緒に。』

『ハイ。』

『ほんたう真箇だよ。寄越さなかつたら俺が迎ひに行くぞ。』

さう言ひながら立ち上つて、健は孝子の隣の卓に行つた。

『お手伝ひしませう。』

『済みませんけれども、それでは何卒どうぞ。』

『アもう八時になりますね。』と、渠は孝子の頭の上に掛つてゐる時計を見上げた目を移して、障子一重で隔てた宿直室を、顎で指した。『まだ顔を出さないんですか？』

孝子は笑つて點頭うなづいた。

その宿直室には、校長の安藤が家族——妻さいと二人の小供——と共に住んでゐる。朝飯あさめしの準備したくが今漸々やうやう出来たと見えて、茶碗や皿ちやぶだいを食卓ちやぶだいに並べる音が聞える。無精者ぶしやうものの細君は何やらぶつぶつ呖々ぶつぶつ小供を叱つてゐた。

新入生の一人々々を、学齡兒童調書に突合して、健はそれを学籍簿に記入し、孝子は新しく出席簿こしらを拵へる。何本を買はねばならぬかとか、石盤は石石盤いしばんが可いか紙石盤かみいしばんが可いかとか、塗板ぬりいた

も有たせねばならぬかとか、父兄は一人々々同じ様な事を繰返し
て訊く。孝子は一々それに答へる。すると今度は健の前に叩頭を
して、小供の平生へいせいの行状やら癖やら、体の弱い事などを述べて、
何分よろしくと頼む。新入生は後からくと続いて狭い職員室に
溢れた。

忠一といふ、今度尋常科の三年に進んだ校長の長男が、用もな
いのおつおつに怖々しながら入つて来て、甘える様やうの姿態しなをして健つくゑの卓
に倚掛よりかかつた。

『彼方あつちへ行け、彼方へ。』

と、健は烈しい調子で、隣室にも聞える様に叱つた。

『ハ。』

と言つて、^{ずる}猾さうな、臆病らしい眼付で健の顔を見ながら、忠一は徐々^{そろそろ}と後退^{あとしぎ}りに出て行つた。為様^{しやう}のない横着^{わうちやく}な児で、今迄健の受持の二年級であつたが、外の教師も生徒等も、校長の子といふのでそれとなく遠慮してゐる。健はそれを、人一倍厳しく叱る。五十分の授業の間を教室の隅に立たして置くなどは珍しくもない事で、三日に一度は、罰として放課後の教室の掃除当番を^{いひつ}吩咐^{そんな}ける。其時は、無精者の母親がよく健の前へ来て、抱いてゐる梅ちやんといふ児に胸を^{はだ}披^ひけて大きい乳房を含ませながら、『千早先生、家^{うち}の忠一は今日も何か悪い事しあんしたべすか？』など、言ふことがある。

『ハ。忠一さんは日増^{ひまし}に悪くなる様です。今日も権太といふ小

供が新らしく買つて来た墨を、自分の机の中に隠して知らない振してゐたんですよ。』

『コラ、彼方あちらへ行け。』と、校長は聞きかねて細君を叱る。

『それだつてなす、毎日悪い事許りして千早先生に御迷惑かける様なんだハンテ、よくお聞き申して置いて、後で私わだしもよつくいひつ吩咐いひつけて置くべと思つてす。』

健は平然けろりとして卓隣つくろりりの秋野といふ老教師と話を始める。

校長の妻は、まだ何か言ひたげにして、上吊うはづつた眉をピリ／＼させながら其処に立つてゐる。然うしてるところへ、掃除が出来たと言つて、掃除監督の生徒が通知しらせに来る。

『黒板も綺麗に拭いたか?』

『ハイ。』

『先生に見られても、少しも小言を言はれる点ところが無い様に出来たか？』

『ハイ。』

『若し粗末だつたら、明日また為直しなほさせるぞ。』

『ハイ。立派に出来ました。』

『好し。』と言つて、健は莞爾にっこりして見せる。『それでは一同みんな帰しても可い。お前も帰れ。それからな、今先生が行くから忠一だけは教室に残つて居れと言へ。』

『ハイ。』と、生徒の方も嬉しさうに莞爾にっこりして、活潑きびに一礼して出て行く。健の恁こな訓導しつけ方は、尋常二年には余りに厳きびし過すぎる

と他の教師は思つてゐた。然しその為^に健の受持の組は、他級の生徒から羨まれる程規律がよく、少し物の解つた高等科の生徒などは、何彼につけて尋常二年に笑はれぬ様にと心懸けてゐる程であつた。

^{やが}臆^て健は二階の教室に上つて行く。すると、校長の妻は密^{こつそり}乎と其後を跟^つけて行つて、教室の外から我が子の叱られてゐるのを立^{たちぎき}聞^きする。意気地なしの校長は校長で、これも我が子の泣いてゐる顔を思ひ浮べながら、明日の教案を書く……

健が殊更校長の子に厳しく当るのは、其児が人一倍悪^{わるさ}戯^たに長^たけて、横着で、時にはその生^{おひさき}先^きが危まれる様な事まで為^し出^でかす^すには違ひないが、一つは渠の性質に、其^{そんな}事^{こと}をして或る感情の満

足を求めると言つた様な点があるのと、又、然うする方が他の生徒を取締る上に都合の好い為でもあつた。渠が忠一を虐めることが厳しければ厳しい程、他の生徒は渠を偉い教師の様に思つた。そして、女教師の孝子にも、健の其そんなしうち行動が何がなしに快く思はれた。時には孝子自身も、人のゐない処へ忠一を呼んで、手厳しく譴たしなめてやることがある。それは孝子にとつても或る満足であつた。

孝子は半年前はんねんまへに此学校に転任して来てから、日一日と経つうちに、何処の学校にもない異様な現象を発見した。それは校長と健との妙な対照で、健は自分より四円も月給の安い一代用教員に過ぎないが、生徒の服してゐることから言へば、健が校長の様で、

校長の安藤は女教師の自分よりも生徒に侮あなどられてゐた。孝子は師範女子部の寄宿舎を出てから二年とは経たず、一生を教育に献げようとは思はぬまでも、授業にも読書にもまだ相応に興味を有つてゐる頃ではあり、何処どこか気性の確固しつかりした、判断力の勝つた女なので、日頃校長の無能が女ながらも齒痒はがゆい位。殊にも、その妻のだらしの無いのが見るも厭で、毎日顔を合してゐながら、碌そつぽ口を利かぬことさへ珍しくない。そして孝子には、万事よろづに生々とした健の烈しい気性——その気性の輝いてゐる、笑ふ時は七八の少年の様に無邪気に、真摯まじめな時は二十六七にも、もつと上にも見える渠の眼、（それを孝子は、写真版などで見た奈勃翁ナポレオンの眼に肖にたと思つてゐた。）——その眼が此学校の精神たましひでゞもあ

るかの様に見えた。健の眼が右に動けば、何百の生徒の心が右に行く、健の眼が左に動けば、何百の生徒の心が左に行く、と孝子は信じてゐた。そして孝子自身の心も、何時しか健の眼に随つて動く様になつてゐる事は、気が付かず^{ひとつ}にゐた。

齡から言へば、孝子は二十三で、健の方が一歳下の弟である。が、健は何かの事情で早く結婚したので、その頃もう小児^{こども}も有つた。そして其家^{そのうち}が時として其日の糧^{かて}にも差支^{さし}へる程貧しい事は、村中知らぬ者もなく、健自身も別段隠^{かく}す態^{ふう}も見せなかつた。或日、健は朝から浮かぬ顔をして、十分の休み毎に眩^{あく}呻^び許^ばりしてゐた。『奈何^{どう}なさいましたの、千早先生、今日はお顔色が良くないぢやありませんか?』

と孝子は何かの機会ひやうしに訊いた。健は出かゝつた生なまあくび呻を囁んで、

『何有なあに。』

と言つて笑つた。そして、

『今日は煙草が切れたもんですからね。』

孝子は何とも言ふことが出来なかつた。健が平生へいぜい人に魂消たまげられる程の喫煙家で、職員室に入つて来ると、甚どんな事があらうと先づ煙管キセルを取上げる男であることは、孝子もよく知つてゐた。卓隣りの秋野は其煙草入を出して健に薦すすめたが、渠は其日一日喫のまぬ積りだつたと見えて、煙管も持つて来てゐなかつた。そして、秋野の煙管を借りて、美味うまさうに二三服続け様に喫のんだ。孝子はそ

れを見てゐるのが、何がなしに辛かつた。宿へ歸つてからまで其
 事を思出して、何か都合の好い名儀をつけて、健に金を遣る途は
 あるまいかと考へた事があつた。又、去年の一夏、健が到頭ふるあ古
はせ裕をを着て過した事、それで左程暑くも感じなかつたといふ事な
 ども、渠かれ自身の口から聞いてゐたが、村の噂はそれだけではな
 かつた。其夏、毎晩夜遅くなると、健の家うち——或る百姓家を半分しき劃
 つて借りてゐた——では障子を開あけ放はなして、居たたまらぬ位杉の
 葉を燻いぶしては、中で頻しきりに団扇で煽あふいでゐた。それは多分蚊帳が
 無いので、然うして蚊を逐出してから寝たのだらうといふ事であ
 つた。其そんなに苦しい生活をしてゐて、渠には些ちつとも心を痛めてゐ
 る態ふうがない。朝から晩まで、真しんに朝から晩まで、小供等を対手に

怡々いはいとして暮らしてゐる。孝子が初めて此学校に來た秋の頃は、
毎朝よあけ味爽から朝飯時まで、自宅に近所の小供等を集めて「朝あさよみ読」
といふのを遣つてゐた。朝なく、黎しのめ明の光が漸く障子に仄ほのめ
いた許ばかりの頃、早く行くのを競つてゐる小供等——主に高等科の
——が、戸外そとから声高に友達を呼び起して行くのを、孝子は毎朝の
様にまだ臥床とこの中で聞いたものだ。冬になつて朝読が出来なくな
ると、健は夜なく九時頃までも生徒を集めて、算術、読方、綴
方から歴史や地理、古むかし來の偉人の伝記逸話、年上の少年には
英語の初歩なども授けた。この二月村役場から話があつて、学校
に壮丁教育の夜学を開いた時は、三週間の期間を十六日まで健が
一人で教へた。そして終ひの五日間は、每晚ふきあげ裾から吹上る夜寒

を恠こらへて、二時間も三時間も教壇に立つた為に風邪を引いて寝たのだといふ事であつた。

それであるて、健の月給は唯たつた八円であつた。そして、その八円は何時いつでも前ぜん借しやくになつてゐて、二十一日の月給日が来ても、いつの月でも健には、同僚と一緒に月給の渡されたことがない。四人分の受領書を持つて行つた校長が、役場から歸つて来ると、孝子は大抵紙幣さつと銀貨を交ませて十二円渡される。検定試験上りの秋野は十三円で、古い師範出の校長は十八円であつた。そして、校長は氣毒きどく相さうな顔をしながら、健には存ぞんざい在ざいな字で書いた一枚の前借証を返してやる。渠けろりは平然としてそれを受取つて、クルクルと円めて火鉢に燻くべる。淡い焰がメラ／＼と立つかと見ると、直

ぐ消えて了ふ。と、渠は不揃な火箸を取つて、白くなつてちひさく残つてゐる其灰を突く。突いて、突いて、そして上げた顔は平然けろりとしてゐる。

孝子はきのどく氣毒さに見ぬ振をしながらも、健のその態度をそれとなく見てゐた。そして訳もなく胸が迫つて、泣きたくなることがあつた。其そんな時は、孝子は用もない帳簿などを弄つて、人ひとあと後まで残つた。月給を貰つた為いそいそに怡々して早く帰るなどと、思はれたくなかつたのだ。

孝子の目に映つてゐる健は、月給八円の代用教員ではなかつた。孝子は或る時その同窓の女友達の一人へ遣つた手紙に、この若い教師のことを書いたことがある。若しや詰らぬ疑ひを起されては

といふ心配から、健には妻子のあることを詳しく記した上で、

『私の学校は、この千早先生一人の学校といつても可い位よ。奥おくさん

様やお子様こさんのある人とは見えない程若い人ですが、男生でも女

生でも千早先生の言ふことをきかぬ者は一人もありません。そら、

小野田教諭がいつも言つたでせう——教育者には教育の精神を以

て教へる人と、教育の形式で教へる人と、二種類ある。後者には

何人でも成れぬことはないが、前者は百人に一人、千人に一人し

か無いもので、学んで出来ることではない、謂はば生うまれつき来の教

育者である——ツて。千早先生はその百人に一人しかない方の組

よ。教授法なんかから言つたら、先生は乱暴よ、随分乱暴よ。今

の時間は生徒と睨にらめツクラをして、敗けた奴を立たせることにし

て遊びましたよなど、言ふ時があります。（遊びました）といふのは嘘で、先生は其 事をして、生徒の心を散るのを御自分の一身あつめに集めるのです。さうしてから授業に取とりかゝるのです。偶たまに先生が欠勤でもすると、私が掛持で尋常二年に出ますの。生徒は決して私ばかりでなく、誰のいふことも、聞きません。先生の組の生徒は、先生のいふことでなければ聞きません。私は其 時、「千早先生はさう騒いでも可いいと教へましたか？」と言ひます。すると、直ぐ静肅になつて了ひます。先生は又、教案を作りません。その事で何日いっだったか、巡まはつて来た郡視学と二時間許り議論をしたのよ。その時の面白かつたこと？ 結局視学の方が敗けて胡麻ごま化くわして了つたの。

『先生は尋常二年の修身と体操を校長にやらして、その代り高等科（校長の受持）の綴方と歴史地理に出ます。今度は千早先生の時間だといふ時は、鐘が鳴つて控所に生徒の列んだ時、その高等科の生徒の顔色で分ります。

『尋常二年に由松といふ児があります。それはうまれつき生来の低脳者で、七歳になる時にななつ燐寸マツチを弄もてあそんで、自分の家うちに火をつけて、ドン／＼燃え出すのを手を打つて喜んでゐたといふ児ですが、先生は御自分の一心で是非由松をあたりまへ普通の小供にすると云つて、暇さへあればその由松を膝の間に坐らせて、（先生は腰かけて、）上からじつ昵と見下しながら、肩に手をかけて色々なことを言つて聞かせてゐます。その時だけは由松も大人しくしてゐて、終ひには

屹度きつとメソく泣出してさひますの。時として先生は、然うしてゐて十分も二十分も黙つて由松の顔を見てゐることがあります。二三日前でした、由松は先生と然うしてゐて、突然眼を瞑つぶつて背後うしろに倒れました。先生は静かに由松を抱いて小使室へ行つて、頭あたまに水を掛けたので小供は蘇生しましたが、私共は一時喫びつくり驚おどろしました。先生は、「私の精神と由松の精神と角力すまふをとつて、私の方が勝つたのだ。」と言つて居られました。その由松は近頃では清書なんか人並に書く様になりました。算術だけはいくら骨を折つても駄目ださうです。

『秀子さん、そら、あの寄宿舎の談話室ね、彼処あそこの壁にペスタロツチが小供を教へてゐる画が掲かけてあつたでせう。あのペスタロ

ツチは痩せて骨立つた老人でしたが、私、千早先生が由松に物を言つてるところを横から見ると、何といふことなくあの画を思出すことがありますの。それは先生は、無論一生を教育事業に献げるお積りではなく、お家の事情で当分あゝして居られるのでせうが、私は恁こんな人を長く教育界に留めて置かぬのが、何より残念な事と思ひます。先生は何か人の知らぬ大きな事を考へて居られる様ですが、私共には分りません。然しそのお話を聴いてゐると、常々私共の行きたいと思つてゐる処——何処どこですか知りませんが——へ段々連れて行かれる様な気がします。そして先生は、自分は教育界獅子身中の虫だと言つて居られるの。又、今の社会を改造するには先づ小学教育を破壊しなければいけない、自分に

若し二つ体があつたら、一つでは一生代用教員をしてゐたいと言つてます。奈何どうして小学教育を破壊するかと訊くと、何有なホンの少しの違ひです、人を生れた時の儘まんまで大きくならせる方針を取れや可いんですと答へられました。

『然し秀子さん、千早先生は私にはまだ一つの謎です。何処か分らないところがあります。ですけれども、毎日同じ学校にゐて、毎日先生の為さる事を見てゐると、どうしても敬服せずには居られません。先生は随分苦しい生活をして居られます。それはお氣毒な程です。そして、先生の奥おく様といふ人は、矢張好い人で、優しい、美しい（但し色は少し黒いけれど、）親切な方です。：

…』

と書いたものだ。実際それは孝子の思つてゐる通りで、この若い女教師から見ると、健が月末の出席歩合ぶあひの調べを怠けるのさへ、コセくした他の教師共より偉い様に見えた。

が、流石は女心で、例へば健が郡視学などと擲からかひ揄かひ半分はんぶんに議論をする時とか、父の目の前で手厳しく忠一を叱る時などは、傍はたで見える目もハラくして、顔を挙げ得なかつた。

今も、健が声高に忠一を叱つたので、宿直室の話しが礎はたと止んだ。孝子は耳敏くもそれを聞付けて忠一が後あとしざ退りに出て行くと、

『マア、先生は！』

と低声こごしゑに言つて、口を窄すぼめて微笑みながら健の顔を見た。

『ハ、ハ、ハ。』と、渠は軽かろく笑つた。そして、眼を円まるくして直ぐ

前に立つてゐる新入生の一人に、

『可いいか。お前も学校に入ると、不断先生の断りなしに入つては不可いけないといふ処へ入れば、今の人の様に叱られるんだぞ。』

『ハ。』と言つて、其児はピヨコリと頭を下げた。火傷やけどの痕の大
きい禿が後頭部に光つた。

『忠一イ。忠一イ。』と、宿直室から校長の妻の呼ぶ声が洩れた。
健と孝子は目と目で笑ひ合つた。

臆やがて、埃に染みた、黒の詰襟の洋服を着た校長の安藤が出て来
て、健と代つて新入生を取扱しごとかつた。健は自分の卓つくえに行つて、そ
の受持しごとの教務にかゝつた。

九時半頃、秋野教師が遅刻の弁いひわけ疏わけを為しいゝ入つて来て、何

時も其室そこの柱に懸けて置く黒縹子の袴を穿いた時は、後からくと来た新入生も大方来尽して、職員室の中は空すいてゐた。健は卓の上から延び上つて、其処に垂れて居る索なはを続つづけ様に強く引いた。壁の彼方かなたでは勇しく号鐘かねが鳴り出す。今かくとそれを待ちあぐんでゐた生徒等は、一しきり春の潮うしほの湧く様に騒いだ。

五分とも経たぬうちに、今度は秋野がその鐘しよ索うさくを引いて、先づ控所へ出て行つた。と、健は校長の前へ行つて、半紙を八つに畳んだ一枚の紙を無造作に出した。

『これ書いて来ました。何卒どうぞ宜しく願ひます。』

笑ふ時目尻の皺の深くなる、口髯の下向いた、寒さうな、人の好さ相な顔をした安藤は、臆病らしい眼付をして其紙と健の顔を

見^{みくら}比べた。前夜訪ねて来て書式を聞いて行つたのだから、展^あけて見なくても解職願な事は解つてゐる。

そして、妙に喉^{から}に絡まつた声で言つた。

『然うでござんすか。』

『は。何卒^{どうぞ}。』

綴ぢ了へた許りの新しい出席簿を持つて、立ち上つた孝子は、チラリと其畳んだ紙を見た。そして、健が四月に罷めると言ふのは予^{かねがね}々聞いてゐた為であらう、それが若しや解職願ではあるまいかと思はれた。

『何と申して可いか……ナンですけれども、お決めになつてあるのだば為^{しかた}方がない訳でござんす。』

『何卒宜しく、お取り計ひを願ひます。』

と言つて健は、軽く会釈して、職員室を出て了つた。その後から孝子も出た。

控所には、級が新しくなつて列ならぶべき場所の解らなくなつた生徒が、ワヤワヤと騒いでゐた。秋野は其間を縫つて歩いて、

『先せんの場所ところへ列ぶのだ、先せんの場所へ。』

と叫んでゐるが、生徒等は、自分達が皆及第して上の級に進んだのに、今迄の場所に列ぶのが不見識な様にでも思はれるかして、仲々言ふことを聞かない。と見た健は、号令壇を兼ねてゐる階段の上に突立つて、

『何を騒いでゐる。』

と呶鳴つた。耳を聳する許りの騒擾さわぎが、夕立の霽はれ上る様にサツと収つて、三百近い男女の瞳はその顔に萃あつまつた。

『一同今迄の場所ところに今迄の通り列べ。』

ゾロ／＼と足音が乱れて、それが鎮しづまると、各級は皆規則正しい二列縦隊を作つてゐた。鬨ひっそり乎として話一つする者が無い。新入生の父兄は、不思議相にしてそれを見てゐた。

渠ゆつくは緩りした歩調で階段を降りて、秋野と共に各級をその新しい場所に導いた。孝子は新入生を集めて列を作らしてゐた。

校長が出て来て壇の上に立つた。密々ひそひそと話声が起りかけた。健うしろは背後の方から一つ咳せき払ひをした。話声はそれで再鎮またつた。

『え、今日から明治四十年度の新しい学年が始まります……』

と、校長は両手を邪魔相に前で揉みながら、低い、怖々おづおづした様な声で語り出した。二分も経つか経たぬに、

『三年一万九百日。』

と高等科の生徒の一人が、妙な声色を使つて言つた。

『叱しツ。』

と秋野が制した。潜しのび笑わらひの声は漣さざなみの様に伝はつた。そして新しい密ひそめ語きが其まじに交まじつた。

それは恰度今の並木孝子の前の女教師が他村へ転任した時——去年の十月であつた。——安藤は告別ことばの辞ことばの中で「三年一万九百日」と誤つて言つた。その女教師は三年の間この学校にゐたのだ。それ以来年長としかさの生徒は何時もこの事を言つては、校長を

輕蔑する種にしてゐる。恰度この時、健もその事を思出してゐたので、も少しで渠も笑ひを洩らすところであつた。

密語ひそめきの声は漸々だんだん高まつた。中には声に出して何やら笑ふのも

ある。と、孝子は草履の音を忍ばせて健の傍かたはらに寄つて来た。

『先生が前の方へ被いらつしや入ると宜うござんす。』

『然うですね。』と渠も囁いた。

そして静かに前の方へ出て、階段の最も低い段の端の方へ立つた。場内はまた水を打つた様に※乎ひつそりとした。

不図渠は、諸あらゆる有生徒の目が、諄々くどくどと何やら話し続けてゐる

校長を見てゐるのでなく、渠自身に注がれてゐるのに気が付いた。いつも例の事ながら、何となき満足が渠の情こころを唆かした。そして、幽か

に唇を歪めて微笑ほほゑんで見た。其処にも此処にも、幽かに微笑んだ生徒の顔が見えた。

校長の話の済んで了ふまでも、渠は其処から動かなかつた。

それから生徒は、瘦せた体の何処から出るかと許り高い渠の号令で、各々おのおのその新しい教室に導かれた。

四人の職員が再び職員室に顔を合せたのは、もう十一時に間のない頃であつた。学年の初めは諸帳簿の綴とじ変へやら、前年度の調物の残りやらで、雑務が仲々多い。四人はこれといふ話もなく、十二時が打つまでも孜せつせ々とそれを行つてゐた。

『安藤先生。』

と孝子と呼んだ。

『ハ。』

『今日の新生は合計で四十八名でございます。その内、七名は去年の学齡で、一昨年をととしのをが三名でございますから、今年の学齡で来たのは三十八名しかありません。』

『然うでござんすか。総体で何名でござんしたらう？』

『四十八名でございます。』

『否いいえ、本年度の学齡児童数は？』

『それは七十二名といふ通知でございます、役場からの。でございますから、今日だけの就学歩合では六十六、六六七にしか成りません。』

『少ないな。』と校長は首を傾げた。

『何有なかに、毎年今日はそれ位なもんでごあんす。』と、十年もこの学校にゐる土地者ところものの秋野が喙くちを容れた。『授業の始まる日になれば、また二十人位来あんすです。』』

『少いなア。』と、校長はまた同じ事を言ふ。

『奈何どうです。』と健は言つた。『今日来なかつたのへ、明日明後あすあさ日つての中に役場から又督促さして見ては？』

『何有なかに、明々後やのあさつて日つてになれば、二十人は屹度来あんすです。保険付だ。』と、秋野は鉛筆を削つてゐる。

『二十人来るにしても、三十八名に二十……残部あと十四名の不就学児童があるぢやありませんか？』

『督促しても、来るのは来るし、来ないのは来なごあんすぜ。』

『ハハ、。』と健は訳もなく笑つた。『可いぢやありませんか、私達が草鞋を穿いて歩くんぢやなし、役場の小使を歩かせるのですもの。』

『来ないのは来ないでせうなア。』と、校長は独語ひとりごとの様ことに意味のないことを言つて、卓つくえの上うへの手焙てあぶりの火ひを、煙管つづで突ついてゐる。

『一学年は並木さんの受持だが、御意見は奈何どうです？』

然う言ふ健の顔に、孝子は一寸薄目うすめを与くれて、

『それア私の方は……』

と言出した時、入口の障子がガラリと開あいて、浅黄が、つた縞しまの古袷ふるあはせに、羽織も着ず、足袋も穿かぬ小造りの男が、セカ／＼と入

つて来た。

『やあ、誰かと思つたば東川ひがしかはさんか。』と、秋野は言つた。

『其そんなに喫驚びつくりする事はねえさ。』

然う言ひながら東川は、型の古い黒の中折を書類入の戸棚の上に載せて、

『やおお急いそがしい様でごあんすな。好いいお天気で。』

と、一同みんなに挨拶した。そして、手づから椅子を引寄せて、遠慮もなく腰を掛け、校長や秋野と二言三言話してゐたが、何やら気の急ぐ態度やうすであつた。その横顔を健じつは昵みつと凝視みつめてゐた。齡は三十四五であるが、頭の頂てつぺん辺べんが大分だいぶん円まろく禿かぶげてゐて、左眼ひだりめが潰つぶれた眼の上に度の強い近眼鏡をかけてゐる。小形の鼻とんがが尖とがつて、見

るから一癖あり相な、抜目のない顔立である。

『時に、』と、東川は話の断目きれめを待構へてゐた様に、椅子を健の卓に向けた。『千早先生。』

『何です？』

『実は其用で態々わざわざ来たのだがなす、先生、もう出したすか？

未だますか？』

『何をです？』

『何をツて。其そんなに白よばくれなくても可よごあんすべ。出したすか

？ 出さねえすか？』

『だから何をさ？』

『解らない人だなア。辞表をす。』

『あゝ、その事ことですか。』

『出しましたか？ 出さねえですか？』

『何故なぜ？』

『何故ツて。用があるから訊くのです。』

よくツケくくと人を圧迫おしつける様な物言ものいひをする癖があつて、少の学識もあり、村で健が友ともだち人扱あつかひをするのは此男の外に無かつた。若い時は青雲の夢を見たもので、機会をりあらば宰相の位にも上らうといふ野心家であつたが、財産のなくなると共に徒らいたづらに村の物笑ひになつた。今では村会議員に学務委員を兼ねてゐる。

『出しましたよ。』と、健は平然けろりとして答へた。

『真箇ほんとすか？』と東川は力を入れる。

『ハ、ハ、ハ。』

『だハンテ若い人は困る。人が甚どんなに心配してるかも知らないで、
気ばかり早くてき。』

『それく、煙草の火が膝に落ちた。』

『これだ!』と、呆れた様な顔をしながら、それでも急いで吸殻
を膝から払ひ落して、『先生、出したつても今日の事ながら、ま
だ校長の手許にあるベアハンテ、今の間にうち戻してござれ。』

『何故なぜ?』

『いやサ、詳しく話さねえば解らねえが……実はなす、』

と穏かな調子になつて、『今日何も知らねえで役場さ来てみたの
す。そすると種市助役が、一寸別室、て呼ぶだハンテ、何だと思

つて行つて見だば先生の一件さ。昨日逢つた時、明日辞表を出すつてゐるだつてが、何しろ村教育も漸々やうやう発展の緒に就いた許りの時だのに、千早先生に罷められては誠に困る。それがと言つて今は村長も留守で、正式に留任勧告をするにも都合が悪い。何れいづ二三日中には村長も帰るし、七日には村会も開かれるのだから、兎も角もそれまでは是非待つて貰ひたいと言ふのでなす、それで畢竟まりは種市助役の代理になつて、今俺ア飛んで来たどころす。解つたすか？」

『解るには解つたが、……奈何どうも御苦勞でした。』

『御苦勞も糞も無ねえが、なす、先生、然う言ふ訳だハンテ、何卒どうか

一 先戻して貰つてござれ。』

戻して貰へ、といふ、その「貰へ」といふ語が驕持心の強い健の耳に鋭く響いた。そして、適確きつぱりした調子で言つた。

『出来ません、其事は。』

『それだハンテ困る。』

『御好意は充分有難く思ひますけれど、為方がありません、出して了つた後ですから。』

秋野も校長も孝子も、鳴なりを潜めて二人の話聞いてゐた。

『出したと言つたところです、それが未だ学校の中にあるのだば、謂はゞ未だ内輪だけの事であねえすか？』

『東川さん、折角の御勧告は感謝しますけれど、貴方は私の気性を御存知の筈です。私は一旦出して了つたのは、奈何どうあつても、

譬へそれが自分に不利益であつても取戻すことは厭です。内輪だらうが外輪だらうが、私は其そんな事は考へません。』

然う言つた健の顔は、もう例の平然とした態さまに歸つてゐて、此上いくら言つたとて動きさうにない。言ひ出しては後へ退ひかぬ健の気性は、東川もよく知つてゐた。

東川は突いきなり然椅子を捻向けた。

『安藤先生。』

その声は、今にも喰つて掛るかと許り烈しかつた。嚇おどすナ、と健は思つた。

『ハ?』と言つて、安藤は目の遣場やりばに困る程周章まごついた。

『先生ほんたうア真箇に千早先生の辞表を受取つたすか?』

『ハ。……いや、それでごあんすでは。今も申上げようかと思ひ
あんしたども、お話中に容喙くちだしするのも悪いと思つて、黙つてあ
んしたが、先刻さつきその、号鐘かねが鳴つて今始業式が始まるといふ時、
お出しになりあんしてなす。ハ、これでごあんす。』と、硯箱の
下から其解職願を出して、『何れ後刻あとで緩りゆつくお話ししようと思つて
あんしたつたども、今迄その暇がなくて一寸此処にお預りして置
いた訳でごあんす。何しろ思懸けないことでごあんしてなす。ハ
』

「その書式を教へたのは誰だ？」と健は心の中で嘲笑あざわらつた。

『然さうすか、解職願お出しエんしたのすか？ 俺ア少しも知らな
ごあんした才なす。』と、秋野は初めて知つたと言ふ態ふうたうに言つた。

『千早先生も又、甚どんな御事情だかも知れねえども、今急にお罷めアねえくとも宜うごあんすべアすか？』

『安藤先生、』と東川は呼んだ。『せせば先生も、その辞表を一且お戻しやる積りだつたのだなす？』

『ハ、然うでごあんす。何れ後刻あとでお話しようと思つて、受取つた訳でアごあんせん、一寸お預りして置いただけでごあんす。』

『お戻しやれ、そだら。』と、東川は命令する様な調子で言つた。『お戻しやれ、お聞きやつた様な訳で、今それを出されでア困りあんすでば。』

『ハ。奈何どうせ私も然う思つてなのでごあんすアハンテ、お戻しすあんす。』と、顔を曇らして言つて、頬を凹へこませてヂウくする

煙管を強く吸つた。戻すも具合悪く、戻さぬも具合悪いといった態度である。

健は横を向いて、煙草の煙をフウと長く吹いた。

『お戻しやれ、俺ア学務委員の一人として勸告しあんす。』

安藤は思切り悪く椅子を離れて、健の前に立つた。

『千早さん、先刻は急さつきいそがしい時で……』と諄くどくど々いひわけ弁疏を言つて、

『今お聞き申して居れば、役場の方にも種いろいろ々御事情がある様で

ごあんす、一寸お預りしただけでごあんすから、兎に角これはお返し致しあんす。』

然う言つて、解職願を健の前に出した。その手は顫へてゐた。

健は待つてましたと言はぬ許りに急に難しい顔をして、霎しばし時、

昵じつと校長の揉手もみでをしてゐるその手を見てゐた。そして言つた。

『それでは、直接郡役所へ送つてやつても宜うございますか？』

『これはしたり！』

『先生。』 『先生。』 と、秋野と東川が同時に言つた。そして東川は続けた。

『然うは言ふもんでアない。今日は俺の顔を立て、呉れても可いいでアねえすか？』

『ですけど……それア安藤先生の方で、お考へ次第進達するのを延さうと延すまいと、それは私には奈何どうも出来ない事ですから、私の方では前々から決めてゐた事でもあり、且つ、何が何でも一旦出したのは、取るのは厭ですよ。それも私一人の為に村

教育が奈何の恁うのと言ふのではなし、却てお邪魔をしてる様な訳ですからね。』と言つて、些と校長に流盼を与れた。

『マ、マ、然うは言ふもんでア無えでばサ。前々から決めておいた事は決めて置いた事として、茲はマア村の頼みを訊いて呉れても可いでアねえすか？ それも唯、一週間か其処いら待つて貰ふだけの話だもの。』

『兎に角お返ししあんす。』と言つて、安藤は手持無沙汰に自分の卓つくろに歸つた。

『安藤先生。』と、東川は再喰つて掛る様に呼んだ。『先生もまた、もう少し何とか言方が有りさうなもんでアねえすか？ 今の様でア、宛然まるで俺に言はれた許りで返す様でアねえすか？ 先生には、

千早先生が何れだけこの学校に要のある人だか解らねえすか？』

『ハ？』と、安藤は目を怖々おつおつさして東川を見た。意気地なしの、能力はたらきの無い其顔には、あり／＼と当惑の色が現れてゐる。

と、健は、然さうして擦すつた揉もんだと果あらそしく諍あつてるのが、――校長の困り切つてるのが、何だか面白くなつて来た。そして、ツと立つて、解職願を再また校長の卓に持つて行つた。

『兎に角これは貴方に差上げて置きます。奈何どうなさらうと、それは貴方の御権限ですが……』

と言ひながら、傍はたから留めた秋野の言葉は聞かぬ振をして、自分の席に帰つて来た。

『困りあんしたなア。』と、校長は両手で頭を押へた。

めつちかち
 眇 目の東川も、意地悪い興味を覚えた様な顔をして、黙つてそれを眺めた。秋野は煙管の雁首がんくびを見ながら煙草を喫のんでゐる。と、今迄何も言はずに、四人の顔を見巡みまはしてゐた孝子は、思切つた様に立上つた。

『出過ぎた様でございますけれども……アノ、それは私がお預り致しませう。……千早先生も一旦お出しになつたのですから、お厭でせうし、それでは安藤先生もお困りでせうし、お役場には又、御事情がお有りなのですから……』と、心持息を逸はづませて、呆氣あつけにとられてゐる四人の顔を急いそしく見巡した。そして、膨むつちりと肥つた手で静かにその解職願を校長の卓から取り上げた。

『お預りしても宜敷よろしうございませうか？ 出過ぎた様でございま

すけれど。』

『ハ？ ハ。それア何でござんす……』と言つて、安藤は密そつと秋野の顔色を覗つた。秋野は黙つて煙管を咬くはへてゐる。

月給から言へば、秋野は孝子の上である。然し資格から言へば、同じ正教員でも一人は検定試験上りで、一人は女ながらも師範出だから、孝子は校長の次席つぎなのだ。

秋野が預るとすると、男だから、且かつは土地者ところものだけに種々いろいろな関係があつて、屹度きつと何かの反響さしひびきが起る。孝子はそれも考へたのだ。そして、

『私の様な無能者やくにたたずがお預りしてゐると、一番安全でございます。ホ、ホ、ホ。』

と、取つてつけた様に笑ひながら、校長の返事も待たず、その八つ折りの紙を袴の間に挟んで、自分の席に復した。その顔はポウツと赧あからんでゐた。

常にない其行動を、健は目を円まろくして眺めた。

『成程。』と、その時東川は膝を叩いた。『並木先生は偉い。出来かした、出来した、なアる程それが一番だ。』

と言ひながら健の方を向いて、

『千早先生も、それなら可えがべす?』

『並木先生。』と健は呼んだ。

『マ、マ。』と東川は手を挙げてそれを制した。『マ、これで可いいでは。これで俺の役目も済んだといふもんだ。ハ、ハ、ハ。』

そして、急に調子を変へて、

『時に、安藤先生。今日の新入学者は何人位ごあんすか？』

『ハ？……えゝと……えゝと、』と、校長は周章まじついて了つて、無理に思出すといふ様に眉を萃あつめた。『四十八名でごあんす。然さうでごあんしたなす。並木さん？』

『ハ。』

『四十八名すか？ それで例年に比べて多い方すか、少い方すか？』

話題はなしは變つて了つた。

『秋野先生、』

と言ひながら、胡麻塩頭の、少し腰の曲つた小使が入つて来た。

『お家から迎えが来たアす。』

『然うか。何用だべな。』と、秋野は小使と一緒に出て行つた。腕組をして昵と考込んでゐた健は、その時ツと立上つた。

『お先に失礼します。』

『然うすか？』と、人々はその顔——屹と口を結んだ、額の広い、その顔を見上げた。

『左様なら。』

健は玄関を出た。処々乾きかゝつてゐる赤土の運動場には、今年初めての黄きいろい蝶々が二つ、フワ〜と纏もつれて低く舞つてゐる。

隅の方には、柵を潜つて来た四五羽の鶏が、コツ〜と遊んでゐた。

太い丸太の尖さきを円めて二本植ゑた、校門の辺ところへ来ると、何れいづ女
生徒の遺失おとしたものであらう、小さい赤櫛が一つ泥の中に落ちて
ゐた。健はそれを足駄の齒で動かしてみた。櫛は二つに折れてゐ
た。

健が一箇年だけで罷やめるといふのは、渠が最初、知合の郡視学
に会つて、昔自分の学んだ郷里の学校に出てみたい、と申込んだ
時から、その一箇年の在職中も、常々言つてゐた事で、又、渠自
身は勿論、渠を知つてゐるだけの人は、誰一人、健を片田舎の小
学教師などで埋もれて了ふ男とは思つてゐなかつた。小ちひい時ひさ分か
ら覇氣さかの壯さかんな、才氣に溢れた、一時は東京に出て、まだ二十はたちに
も足らぬ齡で著書の一つも出した渠——その頃数少すくき年少詩人の

一人に、千早林鳥ちはやりんてうの名のあつた事は、今でも記憶してゐる人も有らう。——が、侘しい百姓村の单调な其日々々を、朝から晩まで、熱心に、又樂し相に、育ち卑しき涕はなたら垂たらしの児女等こどもらを相手に送つてゐるのは、何も知らぬ村の老女達としよりたちの目にさへ、不思議にも詰らなくも見えてゐた。

何れ何事いづなにかやり出すだらう！ それは、その一箇年の間の、四あ周たりの人の渠みちに対する思惑であつた。

加のみならず之としと、年老つた両親と、若い妻と、妹と、生れた許りの女を児んなのこと、それに渠を合せて六人の家族は、いかに生活費かかの費ら

ぬ片田舎とは言へ、又、儉約家しまりやの母がいかに儉しまつてみても、唯八たった円の月給では到底喰つて行けなかつた。女三人の手で裁縫物したてものな

ど引受けて遣つてもゐたが、それとても狭い村だから、月に一円五十銭の収入みいりは覺束ない。

そして、もう六十に手の達とどいた父の乗雲は、家うちの慘状みじめさを見るに見かねて、それかと言つて何一つ家計の補助たしになる様な事も出
来ず、若い時は雲水もして歩いた僧侶上りの、思切りよく飄然ふらりと
家出をしてつて、この頃漸く居処たしかが確まつた様な状態ありさまであつ
た。

健でないにしたところが、必ず、何かもつと収入みいりの多い職業を
見付けねばならなかつたのだ。

『健や、四月になつたら学校は罷めて、何処さか行くべアがな？』
と、渠の母親——背中の方が頭よりも高い程腰の曲つた、極く小

柄な渠の母親は、時々心配相に怗かう言つた。

『あゝ、行くさ。』と、其そのたび度渠は怗こんな返事をしてゐた。

『何処さ？』

『東京。』

東京へ行く！ 行つて奈何どうする？ 渠は以前の経験で、多少は其名を成してゐても、詩では到底生活されぬ事を知つてゐた。且かつは又、此頃の健には些ちつとも作詩の興がなかつた。

小説を書かう、といふ希望は、大分長い間健の胸にあつた。初めて書いてみたのは、去年の夏、もう暑中休暇に間のない頃であつた。『面影』といふのがそれで、昼は学校に出ながら、四日続け様に徹夜して百四十何枚を書かき了へると、渠はそれを東京の知人

に送つた。十二三日経つて、原稿はその儘歸つて来た。また別の
人に送つて、また歸つて来た。三度目に送る時は、四錢の送料は
あつたけれども、添へてやる手紙の郵税が無かつた。健は、何十
通の古手紙を出してみ、漸々やうやう一枚、消印スタンプの逸はづれてゐる郵券
を見つけ出した。そしてそれを貼つて送つた。或雨あるの降る日であ
つた。妻の敏子は、到頭金にならなかつた原稿の、包紙の雨に濡
れたのを持つて、渠の居間にしてゐる穢むさくるしい二階に上つて来た。

『また歸つて来たのか？　アハハハハ。』

と渠は笑つた。そして、その儘本箱の中に投げ込んで、二度と出
して見ようとしなかつた。

何時いつの間にか、渠は自信といふものを失つてゐた。然しそれは、

渠自身も、四周の人も気が付かなかつた。

そして、前夜、短い手紙でも書く様に、何気なくスラスラと解職願を書きながらも、学校を罷めて奈何するといふ決心はなかつたのだ。

健は、例の様に亭乎とした体を少し反身に、確乎した歩調で歩いて、行き合ふ兒女等の会釈に微笑みながらも、始終思慮深い眼付をして、

「罷めても食へぬし、罷めなくても食へぬ……。」

と、その事許り思つてゐた。

家へ入ると、通し庭の壁側に据ゑた小形の竈の前に小さく蹲んで、干菜でも煮るらしく、鍋の下を焚いてゐた母親が、

『帰つたか。お腹が減つたつたべアな？』

と、強ひて作つた様な笑顔を見せた。今が今まで我家の将来でも考へて、胸が塞つてゐたのであらう。

縞目も見えぬ洗晒しの双子の筒袖の、袖口の擦切れたのを着てゐて、白髪交りの頭に冠つた浅黄の手拭の上には、白く灰がかゝつてゐた。

『然うでもない。』

と言つて、渠は足駄を脱いだ。上框には妻の敏子が、垢着いた木綿物の上に女兒を負つて、顔にかゝるほつれ毛を気にしながら、ランプの火屋を研いてゐた。

『今夜は客があるぞ、屹度。』

『誰方？』
どなた

それには答へないで、

『あゝ、今日は急いそしかつた。』

と言ひながら、健は勢ひよくドン／＼梯子はしごを上つて行つた。

(その一、終)

(予が今までに書いたものは、自分でも忘れたい、人にも忘れて貰ひたい、そして、予は今、予にとつての新らしい覚悟を以てこの長編を書き出してみた。他日になつたら、また、この作をも忘れたく、忘れて貰ひたくなる時があるかも知れぬ。——啄木)

〔「スバル」 明治四十二年二月号〕

青空文庫情報

底本：「石川啄木全集 第三卷 小説」筑摩書房

1978（昭和53）年10月25日初版第1刷発行

1993（平成5年）年5月20日初版第7刷発行

底本の親本：「スバル 第二号」

1909（明治42）年2月1日発行

初出：「スバル 第二号」

1909（明治42）年2月1日発行

入力：Nana ohbe

校正：川山隆

2008年10月18日作成

2012年9月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

足跡

石川啄木

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>